

薩摩焼陶工は琉球に どのような製陶技術を伝えたか？

渡辺 芳郎

はじめに

『張姓家譜』によれば、万暦 44 (1616) 年、琉球王府からの要請を受け、薩摩から 3 人の朝鮮陶工、一六・一官・三官が渡琉し、製陶技術を伝えたという。そのうち一六は、琉球名を仲地麗伸、唐名を張献功と改め、崇禎 11 (1638) 年に琉球で死去した (中村・輝編 2011、図 1)。一方、苗代川 (鹿児島県日置市美山) に伝えられた『先年朝鮮より被召渡留帳』には、安・張二姓の陶工が琉球に派遣されたと記されており (深港 2000 など)、上記の張献功の由緒に一致すると考えられる。



図 1 張献功 (仲地麗伸) 墓 (那覇市)

つまり沖縄産陶器はその初期において薩摩焼の技術を導入していたことが推測されるが、その具体的内容についてはこれまで十分に検討されることは少なかった。その理由の一つとして、張献功が渡琉したとされる 17 世紀初頭～前半の苗代川と沖縄両地における陶器生産の具体的様相が不明であったことが挙げられる。しかし近年、沖縄において 17 世紀前半に生産された初期無釉陶器が抽出され、また鹿児島においても 17 世紀に操業した苗代川の堂平窯跡が発掘調査されたことにより、両者の比較が可能になり、議論が蓄積されてきている (新垣 2009・2011・2014、新垣・瀬戸 2004、石井 2009、倉成 2014、渡辺 2004a・2011b・2016b など)。

本稿では、このような調査研究成果に基づき、具体的にどのような技術が伝わり、沖縄で根つき変容したのかについて、17 世紀初頭～前半における苗代川の製陶技術と、沖縄初期無釉陶器のそれとを比較することで明らかにしていきたい。

なお近年、新垣力は「沖縄産陶器」の定義・名称・分類に関して、その歴史的経緯を踏まえつつ大幅な名称変更を提案している (新垣 2016b)。本稿で扱う「初期無釉陶器」についても「初期荒焼」の名称を挙げている。新垣の提案は十分に議論すべき課題であるが、ここでは紙幅の関係もあり触れない。それゆえ本稿では、本稿の元になった口頭発表内容 (2016 年 11 月 20 日) に従って「初期無釉陶器」を用いておく。

わたなべ・よしろう：(鹿児島大学 教授)

1. 薩摩焼の概要 - 朝鮮系窯場を中心に -

薩摩焼とは江戸時代の薩摩藩領（現在の鹿児島県全域と宮崎県南部）で生産された陶磁器の総称である。豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592～98年）の際に島津軍によって連れて来られた朝鮮陶工たちによって始まるが、その後、他の窯場も開かれ、多様な展開を遂げる。現在、薩摩焼は、豎野系（始良市・鹿児島市）、苗代川系（いちき串木野市・日置市美山）、龍門司系（始良市）、元立院系（始良市）、平佐系（薩摩川内市）、能野系（種子島西之表市）の6つの系統の窯場として把握されている（図2）。このうち豎野・苗代川・龍門司系が朝鮮陶工を直接の淵源とする窯場であり、以下、この3つの系統の窯場を中心に概要を述べる。これらは同じ朝鮮系製陶技術を基礎にしながらも、それぞれ異なる性格と歴史を有している。

豎野系窯場の始まりは、島津義弘が朝鮮陶工・金海（和名：星山仲次）に命じて開いた宇都窯・御里窯（始良市）である。主として茶道具を生産し、とくに茶入は古田織

部の支持を得て幕府の要人らにさかんに贈呈された（始良町教育委員会編2004、加治木町教育委員会編2003、上原2005、松村2006など）。鹿児島城が築造されると、城下に豎野冷水窯（鹿児島市）などが開かれた。同窯は薩摩藩窯として、茶道具や白薩摩・象嵌製品など、藩主をはじめとした上級武家や江戸藩邸の什器・調度品、将軍家・他大名家への献上品・贈答品などを生産した。近年、「商売焼」（商品）も多数生産していたことが明らかになっている（戸崎編1978、深港2013、関2017）。

苗代川系窯場は、最初、串木野窯（いちき串木野市）が開かれたが（田澤・小山1941）、慶長8（1603）年、陶工たちは苗代川（日置市美山）に移住する。現在でも焼き物生産が続けられており、「薩摩焼の郷」として知られる。近世を通じて、甕・壺・摺鉢など大型日用陶器の生産を主体とした。18世紀後半以後、土瓶の生産が盛んになり、藩内外に広く流通した（渡辺2015）。また幕末期には色絵陶器と磁器の生産が始まり、前者は明治時代になると金襴手薩摩として欧米に輸出された。発掘調査された窯跡として堂平窯跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター編2006）、南京皿山窯跡（渡辺・金田2012）がある。また明治20～30年代に操業した雪之山窯の陶工たちの居住地もしくは工房跡と考えられる雪山遺跡が発掘調査されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター編2003）。

龍門司系窯場（始良市）は、17世紀第3四半期に磁器生産を目指して山元窯（加治木町教育委員会編1995）が開かれたが、龍門司窯に移ったのちは陶器生産を主体とする。碗や皿などの日用食器の生産が中心で、とくに18世紀後半以後、赤土に白化粧土を施した製品が量産される。また18世紀末頃から、三彩・象嵌製品・鮫肌釉など多様な施釉技法を用いた製品が登場した（渡辺2004b、関2013）。現在も龍門司焼として生産を続けている。

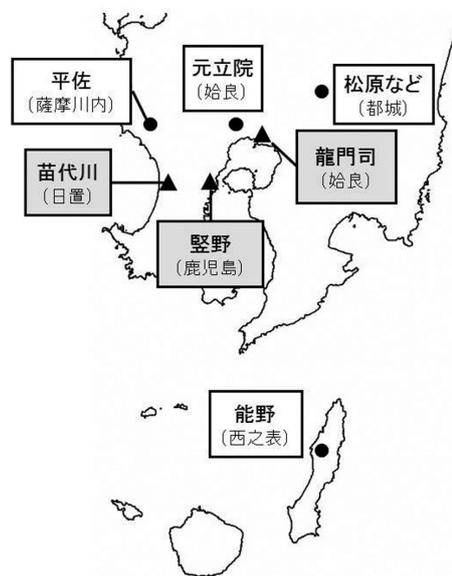


図2 薩摩焼の諸窯
（▲：朝鮮系窯場、●：それ以外の窯場）

以下では、沖縄の陶器生産ともっとも関係の深い苗代川において、17世紀に操業していた堂平窯跡について詳しく見ていきたい。

2. 17世紀の苗代川陶器

堂平窯跡は鹿児島県立埋蔵文化財センターによって発掘調査され、長さ約30m、幅1.2～1.5mの単室登窯跡と、その周辺の工房跡や、失敗品・窯道具を廃棄した物原が検出されている。調査報告書(鹿児島県立埋蔵文化財センター編2006)では、出土した製品の形態や技術から、堂平I a期(1620～30年代)、I b期(1630～50年代)、II期(17世紀後半)に時期細分されている。ここでは陶工が渡琉したとされる1616年に近いI a期の製品とその製陶技術を見ていきたい。

堂平I a期の製品として以下のものがある(図3)。

貯蔵具：甕(甕蓋)・壺(大壺・中壺・受口付壺)・瓶(徳利)・水注

調理具：摺鉢・把手付甕(甑)・片口

食膳具：碗・皿

その他：香炉・漚瓶・馬型土製品

これらのうち下線部を引いた器種は、いずれも朝鮮半島の陶器、いわゆる「甕器(おんぎ)」に同じものがあり、その器形・製陶技術が類似すること、またともに単室登窯で焼成することが指摘されている(鹿児島県立埋蔵文化財センター編2006、片山2012)。とくに甕は、粘土紐積み上げ技法とタタキ技法によって薄い器壁を作り、内面に当て具痕を残すという特徴、また口縁部を外側に折り返して断面三角形を作る技法、貝目積みによる窯詰め技法など、形態的にも技術的にもきわめて近い(図3-2・3)。朝鮮の製陶技術をそのまま使用し続けると言える。片山まびによれば朝鮮王朝時代の陶工集団は、甕や壺をタタキ技法で製作する甕匠(おんじょう)と、碗や皿をロクロ成形で製作する沙器匠(さきしょう)の二者があり、両者は社会的に区分されていたという(片山1998)。また堂平窯跡における初期製品は、韓国慶尚南道における甕器にもっとも近いとされ(片山2012)、堂平窯の陶工たちは甕匠に属すると考えられる。

一方、摺鉢は当時の朝鮮半島にはなく(片山2004)、陶工たちが日本に来てから作り始めた器種である。口縁部の形態は外側に粘土を折り曲げ、胴部に撫でつけることで肥厚している(図3-4)。この形態は他の器種には見られない摺鉢独特の形態であり、当時、西日本に広く流通していた備前(岡山)産の摺鉢の口縁部形態を模倣したと考えられる(鹿児島県立埋蔵文化財センター編2006、渡辺2016a)。

また堂平I a期の碗にはロクロが用いられず、底部も貼付高台を作る(図3-13・14)。堂平窯に本格的にロクロ技法が導入されるのは、II期を待たねばならない。さらにI a期の碗は口唇部が釉剥ぎされており、合わせ口で窯詰めされたと推測される。これは甕や壺の窯詰め技法を応用したものと考えられる。これらのことは堂平陶工が碗の製作・焼成技法を習得していなかった可能性を示唆している(渡辺2011a)。

以上の資料から、堂平I a期の陶工たちが、朝鮮系製陶技術のうち甕器のそれを基盤として、その特徴を保持しつつも、日本という新たな環境・市場に適応するため在地化=薩摩焼化していくプロセスが読み取れる。

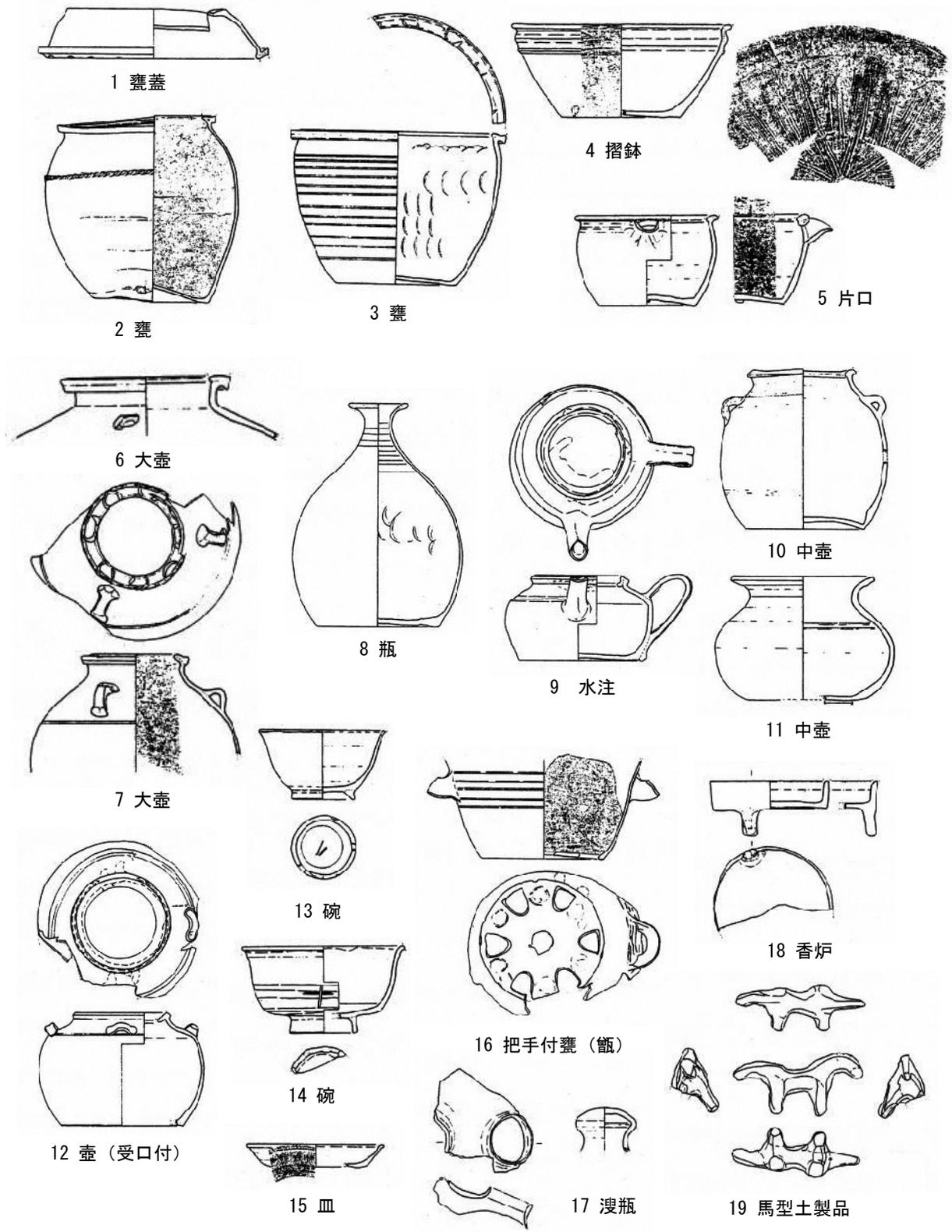


図3 堂平窯跡 I a 期の製品 (縮尺不同)

3. 沖縄初期無釉陶器に見る苗代川の影響

沖縄における陶器焼成窯として、那覇市湧田窯跡（沖縄県教育委員会編 1993・1995・1997・1999）で発見された平窯跡があり、中国の製陶技術に由来すると考えられる。一方、同窯跡では単室登窯跡の一部も見つかっており、のちの喜名焼（読谷村）や壺屋焼（那覇市）での無釉陶器（荒焼）焼成へと引きつがれる。単室登窯は先述のように堂平窯跡で確認されており、苗代川から伝わった窯構造と考えられ、その後の琉球陶器の基本技術として定着したと言える（池田 1995、渡辺 2004a）。

沖縄では16世紀から瓦質土器が焼かれていたが（瀬戸 2009a など）、苗代川からの単室登窯の技術が導入されるとともに、無釉陶器の生産が始まる。17世紀前半頃の初期無釉陶器（図4）と堂平I a期の製品の器種や器形、製作技術を比較すると、両者には共通性が高いものもあれば、異なる部分もある（表1）。

共通性の高い器種として甕・大壺・摺鉢・片口がある。とくに甕は、ともに粘土紐積み上げ技法とタタキ技法で成形され、内面に当て具痕を残し、口縁部の形態も類似するとともに、窯詰めには貝目積み技法が採用されている点で、苗代川の技術が直接的に導入されたとみなせる（図4-1）。ただしナカンダカリヤマ古墓出土の甕（沖縄県立埋蔵文化財センター編 2005）に見られる貝目は、薩摩焼には見られない細かい筋を持つ貝殻によるもので、沖縄在地の二枚貝を使用したと考えられる。大壺も成形技法は同じであるが、口縁部～肩部の形態がやや異なり（図4-6）、これは初期無釉陶器の大壺が東南アジア産の大壺を模倣したと考えられている。このような海外産大壺の模倣は、瓦質土器においてもすでに見られ（図5-1）、初期無釉陶器もその指向性を受け継いでいると言えよう（新垣 2009、瀬戸 2009b）。このことは後述するように、琉球王府が瓦質土器や初期無釉陶器の大壺に何を求めていたかを示唆する。

摺鉢も瓦質土器において製作されており（図5-2）、備前摺鉢の模倣の可能性が指摘されている（新垣 2000）。しかし初期無釉陶器の摺鉢は堂平I a期の外反口縁や口縁下突帯など類似性が高く（図4-2・3）、堂平窯の摺鉢の影響を受けて変容したと考えられる。片口も内面に当て具痕を残す点、口唇部を内側に折り曲げて作る点など（図4-4・5）、堂平I a期のものと共通する。ただし片口は沖縄ではのちに生産が続かないことから、沖縄の食文化の中では必要とされる器種ではなかったであろう。またタタキ成形で作られる瓶も口縁形態に類似したものがある（図3-8、図4-7・8）。

表1 堂平窯・初期無釉陶器・瓦質土器の器種

器種	堂平 I a	初期無釉	瓦質土器
摺鉢	●	●	●
大壺	●	●	●
碗	●	●	●
瓶（徳利）	●	●	●
皿	●	●	●
香炉	●	●	●
水注（急須）	●	●	●
土製品・置物	●	●	●
片口	●	●	
甕	●	●	
甕用蓋	●	●?	
中壺	●		●
把手付甕（甗）	●		
壺（受口付）	●		
瘦瓶	●		
植木鉢		●	●
浅鉢・深鉢		●	●
焜炉		●	●
火入（火舎）		●	●
杯		●	●?
水滴		●	
灯火具（燭台）		●	
煙管		●	
筒物		●	
こね鉢			●
茶釜			●
鍋			●

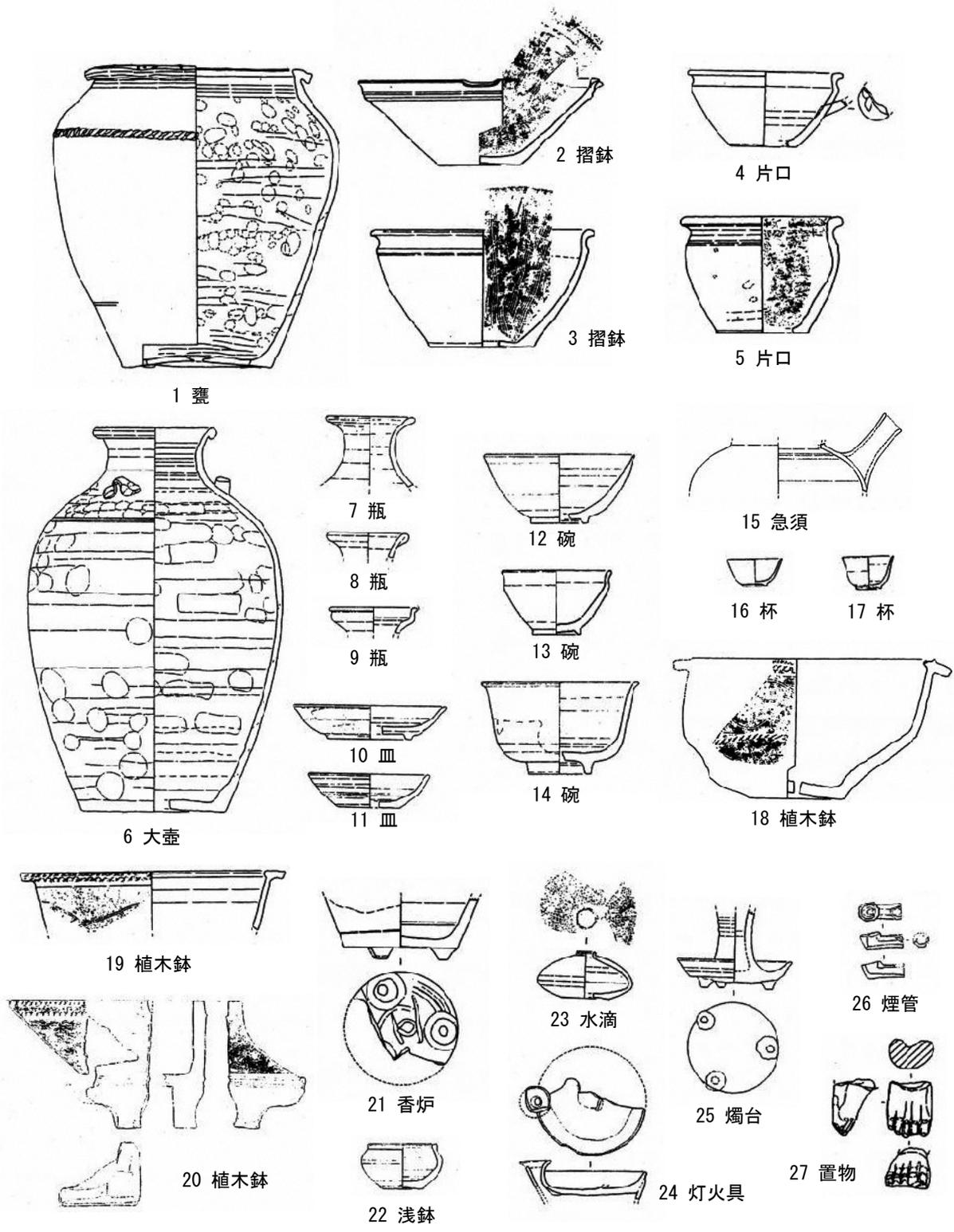


図4 沖縄初期無釉陶器の製品（縮尺不同）

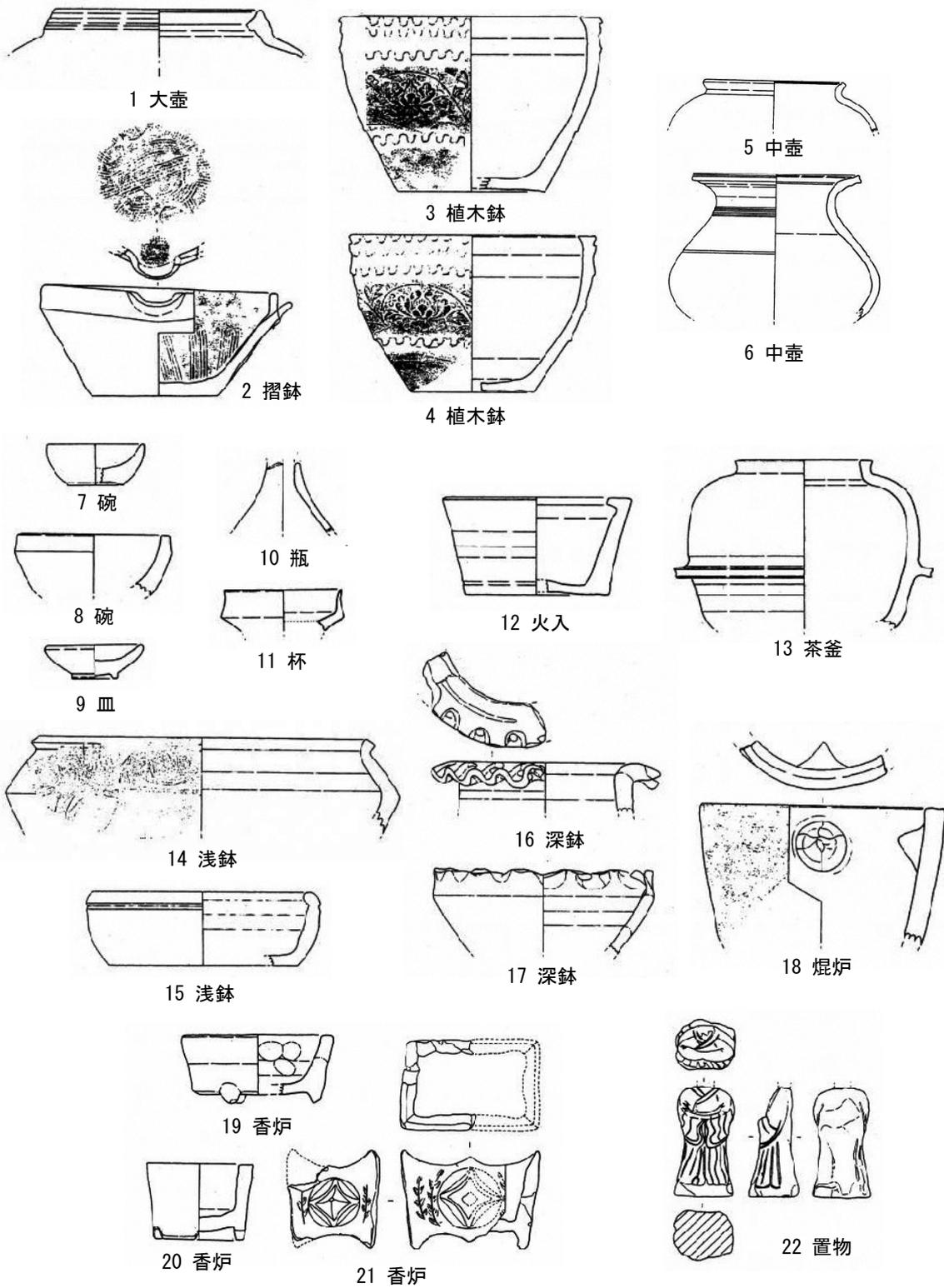


図5 沖縄瓦質土器の製品（縮尺不同）

碗や皿は堂平 I a 期と初期無釉陶器に見られるが、製作技法に違いも見られる（図 4-10～14）。初期無釉陶器の高台には堂平 I a 期と同じ貼付高台もあるが、同時に粘土の円盤を底部に貼り付け、高台内をロクロで削り取る技法が見られる。先述したように堂平 I a 期にはロクロ技法は確認できず、初期無釉陶器における高台を削り出す技法は、苗代川とは別系統（中国か）である可能性を示唆している。

堂平 I a 期の製品には見られず、瓦質土器と初期無釉陶器の両者もしくは片方にのみ見られる器種もある。両者に共通の器種としては植木鉢（図 4-18～20、図 5-3・4）などがあり、瓦質土器のみの器種としては茶釜（図 5-13）、深鉢（図 5-16・17）など、初期無釉陶器のみの器種には水滴（図 4-23）、灯火具や燭台（図 4-24・25）、煙管（図 4-26）などがある。初期無釉陶器に見られる器種は、器種としては苗代川の影響を受けていないが、単室登窯という新しい焼成技術の導入の結果と言えよう。そして上記の器種は、植木鉢や水滴、茶釜、灯火具など嗜好品・奢侈品が目立つことも特徴の一つである。瓦質土器で多数見られる浅鉢・深鉢（図 5-14～17）についても、その一部は水指、建水など茶道具として使われた可能性が指摘されている（新垣 2007）。また香炉は堂平 I a 期、初期無釉陶器、瓦質土器に共通して見られるが（図 3-18、図 4-21、図 5-19～21）、堂平 I a 期の形態は大きく異なり、沖縄のそれは中国磁器の形態を模倣したと思われる。一方、把手付甕（甕）や洩瓶（図 3-16・17）は、沖縄では見られないことから、技術導入にあたっては、沖縄側での主体的な取捨選択も働いていた可能性がある。

さらに、苗代川系技術の導入は、上記のような器種や形態、技法レベルの変化にとどまらず、湧田窯における生産体制の再編成をも促した可能性が指摘されている（石井 2008）。

4. 薩摩焼陶工は琉球にどのような製陶技術を伝えたか？

以上、堂平 I a 期と初期無釉陶器の製品と製作技術を比較した結果は、以下のようにまとめることができる。

- (1) 苗代川からの単室登窯の導入はその後の琉球陶器の技術的基盤になったこと
- (2) 苗代川技術の影響の大きさは器種によって違いがあること
- (3) 苗代川とは別系統と考えられる技術があること
- (4) 技術導入にあたって沖縄側の取捨選択があった可能性があること

琉球王府が薩摩藩に陶工の招聘を要請した理由について、『張姓家譜』には「未諳甄陶」、つまり焼物製作技術はいまだ不十分である、とある（中村・輝編 2011）。では琉球王府は、どのような製陶技術を求めたのか、それにはどのような背景があったのか。これまでの分析結果を踏まえて考えてみたい。

前章で指摘したように苗代川の製陶技術の影響がもっとも顕著に現れているのは、甕や大壺などの大型陶器の製作技術である。沖縄では 15 世紀以後、南中国や東南アジア産の大型の壺・甕が流通していた。それらは商品として運ばれた可能性もあるが、コンテナとして運び込まれ、そののち二次流通したこともあったであろう。しかし 16 世紀後半以後、琉球の対外貿易は衰退へと向かい、海外陶磁器の流通も減少していったことが指摘されている（瀬戸 2009b など）。このような減少に対し

て、瓦質土器で大型製品の生産も試みた可能性が、南中国産の褐釉陶器を模倣した大壺の存在（図5-1）から想像されるが、胎土が液体の貯蔵に適しているとは言えない瓦質土器では十分な代替にはならなかったのであろう。また琉球王府にとって、薩摩藩や徳川幕府へ献上する泡盛の容器としての壺の必要性が高かった可能性も指摘されている（沖縄県立埋蔵文化財センター編 2016）。

つまり琉球王府が「未諳甄陶」を理由に薩摩藩に陶工の派遣を求めた中心的な目的は、このような甕や壺などの大型陶器の欠を補うためであったと推測される。

ただし、苗代川の製陶技術は、「そのまま」導入されたわけではない。堂平窯で生産された器種が取捨選択されていた可能性があり、また茶道具などの嗜好品・奢侈品などは、焼成技術こそ導入しているが、器種・形態的には堂平Ⅰa期には見られないものが多い。つまり導入にあたって琉球側の主体的な選択が働いていたと言えよう。

そのことの背景の一つには、初期無釉陶器や瓦質土器を生産した湧田窯は琉球王府の御用窯的性格を有しており（新垣 2007）、王府からの需要に応えることが、まずなにより重要であったことがあったと推測される。その需要とは、茶道具や植木鉢、香炉などの嗜好品・奢侈品であり、日用大型陶器を生産の主体としていた 17 世紀初頭の苗代川の製陶技術では対応が難しかったのであろう。それゆえそれらは瓦質土器を受け継ぎ、また碗には苗代川以外の技術（中国か）が導入された可能性が考えられるのである。

おわりに

苗代川から伝えられた製陶技術は、沖縄において基礎的技術として受容されながらも、沖縄での選択や変容、また瓦質土器や別系統（中国か）の技術の導入を経て、沖縄独自の陶器へと変化していったと考えられる。さらにその後も薩摩や中国から技術が導入され、あるいは琉球の生活様式からの需要に応える形で、独特の琉球陶器として展開していく。このことは朝鮮陶器の製作技術を基盤としながら、日本市場からの需要への対応や肥前地方（佐賀・長崎県）などからの技術導入により、薩摩焼として在地化していったプロセス（渡辺 2014）と類似している（図 6）。

薩摩焼と琉球陶器は、ともに朝鮮系製陶技術をルーツに持ちながらも、それぞれ別の焼き物としての道を歩んでいったと言えよう。

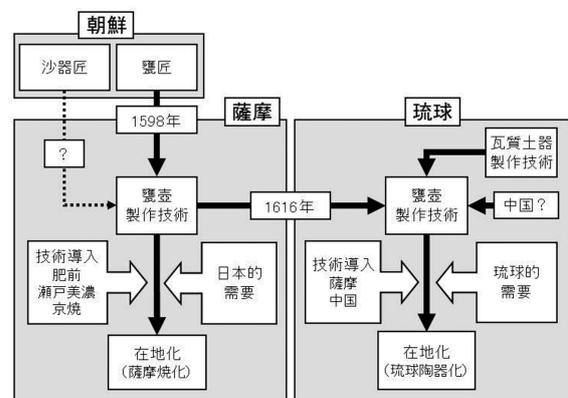


図 6 薩摩焼と琉球陶器の在地化プロセス

参考文献

- 始良町教育委員会編 2004『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』始良町教育委員会（現始良市）
- 新垣力 2000「モデルとコピーの視点からみた窯業開始期の沖縄」『南島考古』19 pp.13-20
- 新垣力 2007「沖縄における茶の湯の普及とその影響-14世紀～17世紀頃の考古資料からの検討-」『南島考古』26 pp.209-220
- 新垣力 2009「16～17世紀における琉球での陶器生産の様相とその周辺」『沖縄考古学会創立40周年記念シンポジウム 考古学から見た薩摩の侵攻400年』資料集 pp.71-82 沖縄考古学会
- 新垣力 2011「16～17世紀の琉球における陶器生産の様相-近年の考古学的成果から-」『琉球陶器の来た道-展覧会関連講座、講演会資料編-』pp.17-20 沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館
- 新垣力 2014「17世紀前半～中葉の琉球陶器について-「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響-」『鹿児島考古』43、pp.11-19
- 新垣力 2016a「瓦質土器の製作技術」『2016年度沖縄考古学会研究発表会「16～17世紀の沖縄における窯業の展開とその背景」資料集』pp.12-20 沖縄考古学会
- 新垣力 2016b「「沖縄産陶器」の定義・名称・分類に関する一考察」『南島考古』35 pp.5-14
- 新垣力・瀬戸哲也 2004「近世初頭における沖縄への窯業技術の伝播-16世紀～17世紀頃の考古資料から-」『第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料集「20年の成果と今後の課題」』pp.83-86 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会
- 池田榮史 1995「琉球近世窯業史考」『琉大アジア研究』創刊号 pp.43-57
- 石井龍太 2008「琉球近世の植木鉢」『東南アジア考古学』28 pp.155-168
- 石井龍太 2009「湧田古窯の再評価-湧田古窯跡の瓦質土器製植木鉢-」『南島考古』28 pp.71-82
- 上原兼善 2005「大名茶の形成と島津氏」『日本史研究』518 pp.1-24
- 沖縄県教育委員会編 1993『湧田古窯跡（Ⅰ）』同委員会
- 沖縄県教育委員会編 1995『湧田古窯跡（Ⅱ）』同委員会
- 沖縄県教育委員会編 1997『湧田古窯跡（Ⅲ）』同委員会
- 沖縄県教育委員会編 1999『湧田古窯跡（Ⅳ）』同委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2001『首里城跡-下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書-』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2004『首里城跡-城郭南側下地区発掘調査報告書-』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2005『ナカンドカリヤマの古墓群』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2010『首里城跡-御内原北地区発掘調査報告書（1）-』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2015『首里城跡-銭蔵地区発掘調査報告書-』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2016『湧田古窯跡出土品展-琉球窯業の萌芽-』解説冊子 同センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2003『雪山遺跡・猿引遺跡』同センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2006『堂平窯跡』同センター
- 加治木町教育委員会編 2003『御里窯跡』加治木町教育委員会（現始良市）
- 片山まび 1998「朝鮮人陶工」とは誰なのか？-一六世紀窯址と岸岳系唐津の比較から-」『陶説』541 pp.34-40

- 片山まび 2004 「倭城出土の陶磁器に関する予察 - 日本出土品を視座として -」『韓国の倭城と壬辰倭乱』 pp. 433-463 岩田書院
- 片山まび 2012 「朝鮮前期甕器と日本薩摩焼の比較研究 - 堂平窯を中心に -」『文物』2 pp. 131-174 (韓文)
- 倉成多郎 2014 『壺屋焼入門』 ボーダーインク
- 関明恵 2017 「豎野 (冷水) 窯跡出土の白薩摩型打ち製品」『中近世陶磁器の考古学』6巻 pp. 153-173 雄山閣
- 関一之 2013 「18世紀から19世紀の龍門司焼の特徴 - 胎土・成形・釉薬から見た変化 -」『鹿児島考古』43 pp. 3-10
- 瀬戸哲也 2009a 「南の境界・琉球の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』22 pp. 157-172
- 瀬戸哲也 2009b 「中国・本土産陶磁器等の組成から見た16～17世紀の沖縄」『沖縄考古学会創立40周年記念シンポジウム 考古学から見た薩摩の侵攻400年』資料集 pp. 49-70
- 戸崎勝洋他編 1978 『豎野 (冷水) 窯址』 社団法人鹿児島共済南風病院
- 中村顕・輝広志 2011 「琉球陶瓦工家譜」『琉球陶器の来た道』展図録 pp. 1-37 沖縄県立博物館・美術館
- 深港恭子 2000 「薩摩焼をめぐる苗代川関係文書について」『黎明館調査研究報告』13 pp. 101-133
- 深港恭子 2013 「千鳥印のある白薩摩と商売焼についての一考察 - 『立野並苗代川焼物高麗人渡来在附由来記』を中心に -」『からから』27 pp. 25-31 鹿児島陶磁器研究会
- 松村真希子 2006 「「島津家文書」にみる薩摩焼」『東洋陶磁』35 pp. 97-112
- 渡辺芳郎 2004a 「近世陶磁器から見た鹿児島と沖縄」『第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料集』 pp. 63-78 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会
- 渡辺芳郎 2004b 「元立院と龍門司 - 加治木・始良系陶器編年のための作業仮説 -」『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』 pp. 118-127 始良町教育委員会 (現始良市)
- 渡辺芳郎 2011a 「重ね焼き技法から見た初期薩摩焼の技術変容 - 堂平窯跡出土資料を中心に -」『鹿大史学』58 pp. 1-13
- 渡辺芳郎 2011b 「薩摩焼と壺屋焼 - 近年の考古学的成果から -」『琉球陶器の来た道 - 展覧会関連講座、講演会資料編 -』 pp. 2-4 沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館
- 渡辺芳郎 2014 「考古学資料から見た近世苗代川の窯業」『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』 pp. 97-124 岩波書店
- 渡辺芳郎 2015 「近世薩摩土瓶の藩外流通についてのノート」『からから』No. 29 pp. 13-21 鹿児島陶磁器研究会
- 渡辺芳郎 2016a 「薩摩焼・苗代川産摺鉢の口縁形態」『亀井明德氏追悼・貿易陶磁研究等論文集』 pp. 306-315 亀井明德さん追悼文集刊行会
- 渡辺芳郎 2016b 「17世紀における薩摩焼製陶技術の琉球陶器への影響」『2016年度沖縄考古学会研究発表会「16～17世紀の沖縄における窯業の展開とその背景」資料集』 pp. 21-34 沖縄考古学会
- 渡辺芳郎・金田明大 2012 『考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究』平成21～23年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書 鹿児島大学法文学部

図表出典

図1 渡辺撮影

図2 渡辺作成

図3 1～17: 鹿児島県立埋蔵文化財センター編 2006

図4 1: ナカンドガカリヤマ古墳 (沖縄県埋蔵文化財センター編 2005)、2・3・13・18: 湧田窯跡行政棟地区 (沖縄

県教育委員会編 1993)、4: 首里城跡城郭南側下地区 (沖縄県埋蔵文化財センター編 2004)、5: 首里城跡御内原北地区 (沖縄県埋蔵文化財センター編 2010)、6-11: 首里城跡銭蔵地区 (沖縄県埋蔵文化財センター編 2015)、12・14・19: 首里城跡木曳門地区 (沖縄県埋蔵文化財センター編 2001)、15・20-22・24-27: 湧田窯跡地下駐車場地区 (沖縄県教育委員会編 1999)、16: 湧田窯跡県庁舎議会議会棟地区 (沖縄県教育委員会編 1995)、17: 首里城跡下之御庭地区 (沖縄県埋蔵文化財センター編 2001)、23: 首里城跡漏刻門地区 (沖縄県埋蔵文化財センター編 2001)

図 5 1・3・4・6-8・11・13・18・19・21・22: 湧田窯跡行政棟地区 (沖縄県教育委員会編 1993)、2・5・9・15・20: 湧田窯跡県庁舎議会議会棟地区 (沖縄県教育委員会編 1995)、10・14・16・17: 湧田窯跡地下駐車場地区 (沖縄県教育委員会編 1999)、12: 首里城跡木曳門地区 (沖縄県埋蔵文化財センター編 2001)

図 6 渡辺 2011b より一部改変

表 1 渡辺 2016b より一部改変

補記

本稿は 2016 年 11 月 20 日、沖縄県立芸術大学で開催された国際シンポジウム「移動する人と技術 - 東アジア窯業技術の伝播と定着 -」(那覇市立壺屋焼物博物館主催)において同題目で発表した際の配付資料を大幅に加筆訂正したものである。発表と本稿執筆の機会を与えていただいた倉成多郎氏(現那覇市歴史博物館)に感謝申し上げたい。